



# 楽しかったシベリア鉄道の思い出

田中 宏

## 1. シベリアとシベリア鉄道

旅行記に入る前に、シベリアについて説明しよう。

シベリアとはユーラシア大陸の北部で、西はバルト海から東はオホーツク海までの広大な地域で、南部のアンガラ川流域のアンガラ楯状地は世界で最初に陸地化したところである。

また、シベリアは南から北へステップ（大平原帯）、沼地、タイガ（針葉樹林帯）、ツンドラ（凍土帯）に分けられ、シベリア鉄道は西部は沼地を通り、中央部と東部はタイガを通る。タイガには針葉樹が密生し、虎、黒熊、シベリアシカ、キツネ、テンなどが生息している。

ほぼ中央の大陸断層で形成されたバイカル湖は淡水で生息する生態系の宝庫である。

西にチュメニ油田、クズネツ炭田、中央にヤクーチア天然ガス田、ヤクート原料炭田、東にサハリン大陸棚探鉱があり、豊かな天然資源に恵まれている。

19 世紀半ばに、アメリカ大陸で大西洋側と太平洋側をつなぐ横断鉄道が建設されたことが、シベリア大陸にもバルト海側から太平洋側へ鉄道をつなぐ構想を生んだ。しかしプロシヤなどが勢力拡大に虎視眈々と睨んでいた時代であり、当時の欧米のレールの幅が標準軌(1,435mm)に統一されつつあるのに反して、ロシアは敢えて広軌(1,524mm)を採用して、ユーラシア大陸の北方に独自の鉄道圏を形成して行くことになったのである。

シベリア鉄道全長 9,300km は 1916 年完成し、現在はハバロフスク近くのアムール川の橋梁(2,658km)を除いて全線複線であり、また全線電化されている。

現在、ロシアの鉄道はアメリカについて世界で第 2 位の貨物輸送実績をもち、長大編成の貨物列車、そして「ロシア号」に代表される長距離列車が連日運行している。

## 2. 同行者と行程

JIC の「シベリア鉄道全線 15 日間」(2004 年)に 8 名が参加した。同行者は 60 代の男性 4 人、主婦 2 人、夫婦 1 組であった。4 人の男性は、かつてはエンジニアとして活躍したが、現在は登山家、陶芸家、水処理コンサルタント、交通技術コンサルタントであった。

行程は次の通りである。

7 月 1 日 (木) 関空又は成田発、ソウル着 (空路)、ソウル 1 泊 2 日

7 月 2 日 (金) ソウル発、ウラジオストク着 (空路)、



ウラジオストク 1 泊 2 日

7 月 3 日 (土) ~ 7 月 6 日 (水) ウラジオストクからイルクーツクまで列車 3 泊 4 日

7 月 6 日 (水) ~ 8 日 (金) イルクーツク 2 泊 3 日

7 月 8 日 (木) ~ 7 月 11 日 (日) イルクーツクからモスクワまで列車 3 泊 4 日

7 月 11 日 (日) ~ 14 日 (水) モスクワ 3 泊 4 日

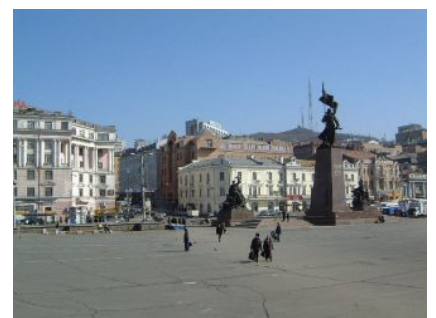
7 月 14 日 (水) モスクワ発 (空路)

7 月 15 日 (木) ソウル着、ソウル発、関空又は成田着 (空路)

## 3. ウラジオストクで

ウラジオストク空港で、モスクワまでの添乗員の出迎えを受けた。体格のよいカムチャツカ出身のロシア人男性で、日本に留学したことがあり、ユーモアを交えたとても流暢な日本語を話した。

ウラジオストクは札幌とほぼ同じ緯度で、人口 65 万の極東地域の最大都市である。着いた日はちょうどロシア領となって 150 年祭で、革命戦士広場に大勢の市民が集まり、ステージでは着飾った子供たちがスピーカーから流れる「カチューシャの歌」に合わせて、コサックの踊りをしており、それを見ていた同行の主婦は隣の中年女性からアイスクリームを貰っていた、「ロシア人は親切ですね」。夜は景気よく花火を打ち上げていた。



ウラジオストク駅はとんがり帽子の屋根、外壁がクリーム色の美しいひととき目立つ建物で、旅への夢を誘う。ここはシベリア鉄道の終着駅である。駅には 9,288km と書かれたモニュメントが立ち、その前に 1940 年代に活躍した大型の蒸気機関車が記念物として飾ってあった。

#### 4. ウラジオストクからイルクーツクまでの列車の旅

7 月 3 日 18 時ごろ、ウラジオストク駅の低く広いホームに「ノボシビルスク号」(ウラジオストク発ノボシビルスク行き) は停車していた。添乗員から切符を渡され、パスポートと一緒に女性車掌に渡してチェックを受け、最後尾の 17 号車のデッキを上がった。

現地時間 20 時 17 分 (モスクワ時間 13:17、以降カッコ内はモスクワ時間)、静けさの中で列車がかすかに動いているのを体感する、定刻の発車であった。

コンパートメントの中は、1 室に上下 2 段のベッドが向かい合って 2 組あり、敷き布団と毛布と枕が準備されており、間もなく女性車掌がシーツを持ってきた。暖房が効きすぎているようで、木製の窓枠を懸命になって引き下ろした。後で食堂車に行くときコンパートメントの仕切りのないベッドの羅列した一般車の中を通ったが、どの車両も満員だった。

しばらくして白樺林の中にダーチャと呼ばれる郊外の個人農園が見えてきた。都会の人々は週末にここで野菜などを作り、自然の中の生活を楽しんでいる。大きな都市に近づいたときにもダーチャをよく見かけた。

私たち 4 人は、コンパートメントでビールやウオッカのつまみにパンやチーズやソーセージなどの遅い夕食を始め、これからの長い旅の行程を地図を見ながら話し合った。



黒い雲で薄暗くなってきた中で白樺林がどんどん過ぎ去っていく。車内の明かりがついた。

ベッドに横になるが、列車の進行方向の衝撃が全く感じられない。これはヨーロッパの客車列車と同じような客車と客車の間に車端ダンパーがついていて、ブレーキなどの列車間の衝撃を吸収しているからであろう。でも 2 段目のベッドには落下防止の柵がないのは、寝相の悪い人には心配である。ウオッカの酔い心地とともに眠りに入った。

ルジノに 2 日目 2 時 24 分 (19:24) 着。15 分停車。

9 時 (2:00) にハバロフスクに停車。目覚めた乗客やペットの犬がホームや線路の上に降りて、外の空気を吸っている。急いで 17 両連結した先頭まで走って行き、

機関車をカメラに収めた。駅員が各車両に給水し、車掌が台車のベアリングが過熱していないか手で触りながら点検をしていた。ゆでたジャガイモ、トマト、ピーマン、ソーセージ、シベリアギョウザなどを売っていた。大体日本円にして 50 円から 200 円ぐらいである。列車の後ろに客車が 2 両増結され、19 両編成となった。約 20 分後、発車。

そのうち地形が険しくなり、急勾配、急カーブで、列車の速度が下がってくる、カメラを窓の外に突き出し、先頭に行く機関車を撮った。

隣の部屋には、半身裸の若者たちが、私共が珍しいものと見えて、こちらのコンパートメントに入ってきて、いろいろ話し掛けてきた。ウオッカを勧めたらぐっと一息に飲み、ピクルスをむしゃむしゃ食べ、その汁をぐっと飲み込んだ。18 歳だといっていた。この車両にはトイレは 1 つしかないが、彼らがそこで長時間体を洗っているのには困った。

ウラジオストクから乗ってきた家族に 3 人の可愛い女の子たちがおり、2 日目から暇をもてあまして廊下を走り回っていたとき、同行の陶芸家が



色紙をあげた。同行の主婦が鶴の折り方を教え始めたところ、彼女の部屋が折り紙教室になり、子供たちの母親までも参加した。母親は主婦の健康を気遣い、子供たちに自分たちの部屋へ戻させた。翌日、子供たちは感謝の気持ちを書いて持ってきた。その中の 1 つを紹介しよう、

「あなたは星のように輝いています。いつまでもお幸せに。私は今日のこの日を決して忘れません」

3 日目 7 時 02 分 (0:02) にウルーシャに着く。駅にはタンク車の長い列が並ぶ。きゅうり、トマト、魚の燻製などを買う。添乗員のロシア人が生卵を買ってきた、両端に小さな穴を 1 つずつ開けて片方から吸って飲み込むのである。かつては日本人もこうして飲み込んでいたものであった。

タイガの針葉樹林が続き、それが途切れると広いお花畑の平原が続く。昔は全部タイガだったという、シベリアでも樹木がかなり伐採されていることは、地球温暖化に大きく影響しているだろう。



ザバイカルスクを 18 時 37 分 (11:37) に発車したあと、食堂車に行く、パン、ボルシチ (スープ)、サラダ、メインは魚料理でトマト、キュウリ、いためたジャガイモ、オリーブの実が添え



であった。これらの食事とウオッカがとてもよくあった。

カルイムスカヤに4日目0時01分(17:01)に着く。ここまでモスクワとの時差が7時間で、次のチタからの時差は6時間だ。列車が西へ進むにつれ、モスクワとの時差は1時間単位で縮まっていく。

カムイルスカヤ～ウラン・ウデ間は標高1,500m以上の山岳地帯を縫って走り、1000分の18という勾配を越えた。

チタに25時17分(17:17)着、25分停車。ここは中国との接続駅で、ハルピン、瀋陽、北京に繋がり、中国系の人々の乗り降りを多く見かけた。

チタを出て、ヤプロノボ山脈の山岳地帯をぬうように走り、やはり1000分の18の勾配を越えた。

ウラン・ウデに10時31分(4:31)着、23分停車。ここはモンゴルのウランバートルへの接続駅であり、国境警備隊が口輪を付けた2匹のシェパードと共に警備していた。中国人とは違う服装の人が下車していた。駅構内にかつての陸の王者蒸気機関車が保存されていた。アイスクリームがうまかった。

ウラン・ウデを出て、2時間ほどした頃、バイカルの美しい湖面が見えてきた。列車は湖に沿って右側にカーブしていく、ここは最も難しい工事だったという、切り立った山裾に沿って勾配を登る電気機関車の姿がよく見えた。

16時47分(11:47)にイルクーツク駅に到着した。女の子たちの父親が重たいスーツケースを車両のデッキから降ろしてくれた。彼らはこの列車の終着駅ノボシビルスクで祖父母の家に泊まるという。

ホームで若いロシア人女性のガイドの出迎えを受けた。駅舎は工事中だったが、外の壁面はやはりクリーム色で、ウラジオストクよりも大きな造りだった。



## 5. イツクーツクとバイカル湖で

イルクーツクはシベリアのパリといわれ、美しい町並みであった。着いた日は、35°Cの観測史上最高気温でむんむんしていたが、翌々日は雨で恐らく20°Cぐらいに下がっていた。

イルクーツクから70km離れたバイカル湖畔のリストヴァンカでは、18～19世紀のコサックの農家、教会、学校などが白樺林の中で保存されていた。バイカル湖は世界最大の淡水湖で、透明度は世界一で40mという。バイカルとは豊かなという意味で、ロシア人の母なる湖である。ロシア正教のニコリスカヤ教会の中の壁は沢山の聖なるイコンが飾られ、スカーフを着けた婦人が沢山の

ローソクの中で祈りを捧げていた。

## 6. イルクーツクからモスクワまでの列車の旅



7月8日現地時間16時20分(モスクワ時間11:20)、私共はイルクーツク駅始発の「バイカル号」で残り半分の旅に出た、今度は12号車。

車両は2001年ロシア製で、車体はブルーでバイカル湖を表し、空調付で気持ちがいいのだが、窓は固定式なので写真撮影はガラス越しになる。

タイシエトに2日目3時36分(22:36)着、5分停車。タイシエトから第2シベリア鉄道と言われるバム鉄道3,145kmが日本海側のコムソリスクまで繋がっている。

ノボシビルスク20時49分(17:49)着、16分停車。ノボシビルスク～オムスク間はロシア鉄道で最も貨物輸送量の多い線区である。ウラルの工業地帯とクズバス工業地帯を結ぶ大動脈になっている。発車後しばらくして、オビ川橋梁を渡った。

3日目4時半頃、真っ赤な太陽が東の空から登ってくるのではないかと。オムスク4時49分(1:49)着、15分停車。ドストエフスキーが4年間重労働に服した町。

チュメニ12時11分(9:11)着、20分停車。1586年に開拓されたシベリアで最も古い町。

スヴェルドロフスク(エカテリンブルク)16時00分(14:00)着、23分停車。エカテリーナ1世女帝の名をとったロシア有数の工業都市で、人口125万人。さすがに駅は大きく近代的で、コンコースの中は人でごったがえしていた。発車後しばらくして、ウラル山脈のヨーロッパとアジアの境界を示すオベリスクの前をあっという間に通過した。



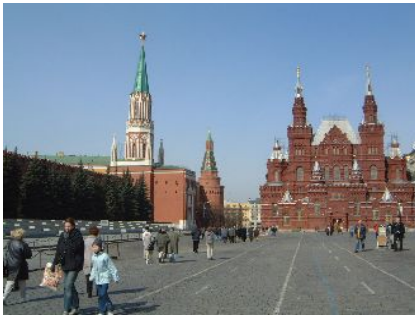
ゴールキ・モスク4日目8時43分(8:43)着、15分停車。通勤電車を多く見かけた。モスクワに近づき、ロシア正教の金色に輝く美しいドームが見えてきた。

モスクワ(ヤロスラヴスカヤ)16時42分着、今までの低いホームと違って、初めての高いホームに降り立ち、列車の進行方向に歩いていくと、始発点の記念碑が建っていた。ホームをそのまま進むと、階段も改札口もなく広場に出た。はるばる太平洋側からやって来たにしては、拍子抜けであった。

## 7. モスクワで

モスクワは緑の季節で爽やかであった。ノボデビッチ修道院、赤の広場、クレムリン宮殿、モスクワ大学、地下鉄などを見物した。

モスクワにはオペラ、芝居などの劇場がたくさんある。ポリショイ劇場は夏季休演中であったが、青年劇場（オペラ劇場形式）ではチャイコフスキーのバレエ



を連日サマー・コンサートで催しており、「白鳥の湖」を前から 7 列目の中央で鑑賞することができた。演出はウラジミール・モイセエフ、主演はオルガ・パヴロヴァ、指揮はユージン・アモゾフで、ロシア・クラシック・バレエの最高キャストで、夢のようだった。

また、モスクワにはいろいろな美術館があり、なかでも「トレチャコフ美術館」はロシアの宗教画から現代に至るまでの優れた絵画を沢山展示している。アンドレイ・ルブリョフの「三位一体」、クラムスコイの「トルストイの肖像画」などを見ることができたのは思いもよらないことだった。

## 8. おわりに

帰国後、何人かの鉄道専門家に今回の長いシベリア鉄道旅行で列車の運行時間がほとんど遅れなかったことを話すと、皆それは素晴らしいことだと感心していた。

この長期の旅行で、とてもよい旅行のパートナーに恵まれたこと、そして韓国やロシアで出会った多くの方々を思い出す、添乗員、車掌、列車の乗客、売り子、ホテルの人々、忘れた傘を保管してくれた掃除のおばさん、・・・。

田中宏(たなかひろし)

(社)日本技術士会会員、(社)日本鉄道技術協会会員、  
田中宏技術士事務所代表

## シベリア鉄道乗車時にあったらよいもの(夏季)

藤田 航三(同ツアー参加者)

- ステンレス・ボトル—サモワール(湯沸器)からの給湯用
- コップ、紙皿、ラップフィルム
- 万能ナイフ、はさみ、わりばし、つまようじ
- 塩、こしょう—停車時に買うゆで卵、じゃがいも、トマト、きゅうり等の味付け(インスタント味噌汁もあれば可)
- ティーバッグ(紅茶、日本茶等)、嗜好品  
(注:ウオッカはホームで買えない場合が多い)
- トイレ紙(1巻)、ウエットティッシュ
- スーパーのポリ袋—室内でのゴミ袋
- サンドル—室内用
- 虫除けスプレー—停車駅によっては蚊が多い

他に車掌(女性が多い)への手土産(複数個)—日本のなもの、サービスが急によく  
同乗者に子供も多いので、折り紙(実際にできればなお可)等のプレゼント品

< JIC より >

参加者の方からの感想によれば、車中では食事に困ることがなかったとのこと。食堂車もさることながら、途中の駅で売り子たちの販売するゆでたジャガイモやチーズやハム、またピロシキや手作りのピクルスなど素朴なロシア料理でおなかを満たすことができましたよう。

お湯は自由にもらえるので、日本から持って行くカップラーメンなどのインスタント食品も車内では役に立つことでしょう。

また、シベリア鉄道の車中での醍醐味はやはり現地のロシア人乗客たちとの交流です。たとえ言葉は分からなくても、自分たちのアルバムや日本の紹介などをすることができれば、思い出いっぱい楽しい旅行になるでしょう。またトランプや携帯チェスなどを持っていけば、ロシア人との交流試合も楽しめるかもしれませんね。



## JIC コメント

今回の旅行を企画して感じたのは、いつまでも好奇心と元気を失わない熟年世代のパワーでした。参加者平均年齢が 63 歳の皆さんのパスポートを拝見する機会がありましたが、いろいろな国の査証があり、何度も海外旅行に行かれていますことがよく分かりました。またインターネットを駆使して情報収集しておられる方も多数、ご自身のホームページを作成しておられる方もいらっしゃいました。

いくつになっても海外旅行への好奇心を失わない方のために、ジェーアイシー旅行センター(株)ではロシア CIS 諸国専門旅行会社ならではの参加者に楽しんでいただけるような旅行企画を作りたいと考えています。

「シベリア鉄道全線 15 日間」は参加者の皆さんにご好評いただいたので、来年以降も計画しています。お楽しみに!

大阪 小原